

18～19世紀における回部王公とベク制に関する一考察

——ハーキム・ベク職への任用を中心に——

河野 敦史

はじめに

清朝は1759年に、主にテュルク系ムスリムが居住するタリム盆地周縁オアシス地域を征服した。清朝は、「回部」（あるいは「回疆」）と呼んだ当該地域を支配するにあたって、現地の有力者を官吏として任用するベク（伯克）制を敷いて間接統治を行うと共に、協力的な現地の有力者に世襲の爵位を与えて王公として待遇した。本稿では、この様に清朝から爵位の世襲を許された（即ち『欽定外藩蒙古回部王公表伝』に表と伝が立てられた）テュルク系ムスリムの王公達を「回部王公」と呼称する。

清朝がベク制と回部王公を通してテュルク系ムスリム社会を如何に統治したのかという重要な問題を考究する上で、先行研究においてはとりわけベク制⁽¹⁾の制度面における特徴についての検討が積み重ねられてきた。他方、回部王公についてはハミとトルファン⁽²⁾の郡王（領）の扎薩克についての役割を明らかにする研究が為され[佐口 1986: 116–234; 蘇・黄 1993; 佐口 1995: 198–288; 王・馬 2009: 87–101]、扎薩克以外では北京在住の回部王公に注目した研究が為されてきた[佐口 1975: 364–377; 佐口 1963: 80–89; Fletcher 1995: 167–172; 王力・王希隆 2006: 106–110]。しかし、新疆（より厳密に言えば天山南路）在住の回部王公についてはクチャの鄂対（Hadī）の一族に注目した研究[聶・王 2002: 39–47]があるものの、清朝に協力した第一世代の王公の人物史[陳超 1987: 111–115; 鄒礼洪 1995: 11–19]が主流であった⁽²⁾。この他、回部王公の権力の継続性について注目した研究としてNewby[1998: 286–289]があるが、この研究も直接言及しているのは主として第一世代の王公についてである。これらの先行研究には、研究の対象を特定の一族や特定の世代（第一世代）に限定したために、回部王公のベク制における役割に関する検討も含め系統的な考究に至らなかったという問題点がある。

⁽¹⁾ ベク制に関する代表的な研究としては、佐口[1963: 103–192]がある。

⁽²⁾ 人物史ではない研究としては、例えば、小沼[2003: 45–48]が征服前における清朝の回部支配構想と関連させて、天山南路出身のベク（後の回部王公）の具体的な行動について明らかにしている。

これに対して、Brophy⁽³⁾ [2008: 69–90] の研究はテュルク語史料を主として用い回部王公に概括的な分析を加え、回部王公（Brophy は the wangs と呼称している）を清朝が創りだした新しい支配層と位置付けている⁽⁴⁾ 点で、その意義は重い。しかし、Brophy の研究も対象としているのは額貝都拉（‘Ubayd Allāh）、額敏和卓（Imīn Khwāja）、霍集斯（Khwāja sī）、鄂対の四つの一族に過ぎない。

この様に先行研究には研究対象とする王公一族⁽⁵⁾ に偏りが見られるとともに、王公一族がベク制を通して果たした回部統治における役割を探るという視点が欠けている。ベク制度下の回部における王公一族の政治上の位置づけを探るためには、王公一族のベク職への任用の在り方を究明することが必要不可欠である。もちろん王公一族を扱う先行研究においても、そのハーキム・ベク（阿奇木伯克）への任職は触れられてきた [佐口 1986: 173–174; 聶・王 2002: 42–45; 王・馬 2009: 91–97]。しかし、それはあくまで王公一族を扱う中でその任職に分析を加えたに過ぎず、ベクへの任職と王公一族とを結びつけて考えることを前提とする検討ではなかった。

このような先行研究の限界をふまえ、本稿においては回部統治の基幹を成すベク制の中における王公一族の位置づけを探る目的のもと、最高位のベクにしてオアシス都市の行政長官であったハーキム・ベクに王公一族がどのように任用されていたのかを検討する。

もちろん、ハーキム・ベクへの王公一族の任用のあり方に対象を絞って検討することは、彼らのベク制の中における位置付けを明らかにすることに即座につながるわけではない。しかし、ハーキム・ベクがベク制においてテュルク系ムスリムが任用され得る最高の地位であることを考慮すれば、ハーキム・ベクへの任用について検討することが、第一義的に重要な作業と考えられる。そのため、本稿ではハーキム・ベクに関するデータをまとめるを試みた。

具体的には、1759 年の征服から 1864 年に反乱で支配が一旦途切れるまでの約百年間の回部諸都市のハーキム・ベクを確認し、その中に王公一族がどの程度任用されていたのかを検討する。この作業から抽出されたデータをもとに、ベク制の中における王公一族の位置づけについて考察を加えたい。

⁽³⁾ Brophy [2008: 69–90] は、額貝都拉、額敏和卓、霍集斯、鄂対の 4 人の回部王公の出自について検討した上で、この 4 人の王公の子孫の文化事業について触れてこの時代にイスラーム文化の適度な発展が見られたことを指摘している。

⁽⁴⁾ Brophy [2008: 84] は、「清朝が意識的かどうかはともかく、チャガタイ・ハーン家の後裔と主なホージャの血統を引く直接の子孫を避けたことで、チャガタイ・ハーン家の君主とナクシュバンディー教団のスーフィーの支配下にあった諸オアシスと以前には関連していた家族的もしくは組織的つながりに欠ける新しい支配層を創った」としている。

⁽⁵⁾ 本稿で「王公一族」と表現した場合、それは回部王公の子孫、兄弟、叔父、伯父、甥、姪、娘婿を指す。

方法としては、『欽定外藩蒙古回部王公表伝』(以下『王公表伝』と略す。以下本稿で頻繁に利用する史料については、文末の参考文献一覧に掲げる略称で示す)とその続纂本から得た回部王公の人名、爵位、親族関係等が各種史資料から抽出したハーキム・ベクの人名、爵位、親族関係等と一致するかを確認し、一致した場合は回部王公と同一人物であると判断した。

本稿で主として使用した史料は漢文史料であって、編纂史料としては『欽定外藩蒙古回部王公表伝』⁽⁶⁾(乾隆44年)とその續纂本(嘉慶17年、道光19年、道光29年、咸豐9年)、『清実録』(高宗～穆宗)、奏稿や方略など、檔案史料としては『上諭檔』(嘉慶～同治朝)、『宮中檔奏摺』と『軍機處檔摺』を使用した。また、乾隆朝の後期から嘉慶朝については、『清代辺疆滿文檔案目録』の新疆巻からも関連するデータを取得した⁽⁷⁾。

第一章 回部王公の系統

まず、『王公表伝』とその続纂本に基づいて、王公一族と爵位について確認したい。『王公表伝』内部の分類として、哈密回部、吐魯番回部、居京師之回部、居新疆之回部の四つの分類がある。この内、哈密回部と吐魯番回部は天山東路において扎薩クの地位を与えられた者達、居京師之回部是北京在住の者達、居新疆之回部は天山南路に住んでいる者達である。さらに、筆者はこれら四つの分類に加えて、十九ある爵位を十一ある一族の家系ごとにわけた。それをリストにして、清代の各回部王公を示すと以下ようになる。なお、リスト作成にあたっては『王公表伝』とその続纂本に載る各王公の表、列伝を参照し、それ以外の史料に拠った場合は*と番号を付しリストの下に示した。なお、次章における検討との関連のため回部王公の人名には通し番号を付した。

⁽⁶⁾ 『欽定外藩蒙古回部王公表伝』は、乾隆帝が作成を命じ、国史館纂修の祁韻士を中心に編纂されたもので、内外モンゴル、オイラート、チベット、回部の王公の封爵の承襲を示す表と、各部の総伝と王公の列伝がのる伝からなる[宮脇1991: 1-14]。『王公表伝』の続纂本には、嘉慶年間のものが一つ、道光年間のものが二つ、咸豐年間のものが一つある[ウスベンスキー2004: 8]。

⁽⁷⁾ 本来は満洲語の檔案に直接当たるべきであり、今後の課題としたい。

〔1〕哈密回部。

(1) 額貝都拉の一族〈1〉、爵位は一つ。

① 額貝都拉の家系

継承回数	通し番号 / 人名 / ローマ字表記	在位年代	血統	爵位の変遷
初	1) 額貝都拉 (‘Ubayd Allāh)	1697–1709	黙黙特夏の子 ^{※1}	扎薩克一等達爾漢
一	2) 郭帕伯克 (Kopa Beg)	1709–1711	額貝都拉の長子	扎薩克一等達爾漢
二	3) 額敏 (Imīn)	1711–1740	郭帕伯克の長子	扎薩克固山貝子
三	4) 玉素ト (Yūsuf)	1740–1766	額敏の長子	郡王品級扎薩克多羅貝勒
四	5) 伊薩克 (Ishāq)	1766–1780	玉素トの次子	郡王品級扎薩克多羅貝勒
五	6) 額爾德錫爾 (Ardashīr)	1780–1813	伊薩クの長子	郡王品級扎薩克多羅貝勒
六	7) 伯什爾 (Bashīr)	1813–1867 ^{※2}	額爾德錫爾の子	扎薩克和碩親王 ^{※3}
七	8) 売哈莫特 (Muḥammad) ^{※4}	1867 ^{※5} –1881 ^{※6}	伯什爾の子 ^{※7}	扎薩克和碩親王 ^{※8}
八	9) 沙木胡索特 (Shāh Maqṣūd) ^{※9}	1882 ^{※10} –1912 ^{※11}	伯什爾の娘婿 ^{※12}	扎薩克和碩親王 ^{※13}

^{※1} [辛卯侍行記 6: 11; 佐口 1995: 214]^{※2} [辛卯侍行記 6: 17]^{※3, ※4, ※5, ※7, ※8, ※9, ※13} [清史稿 211: 8738–8740]^{※6} [辛卯侍行記 6: 20]^{※10} [德宗実録 149: 9b, 光緒 8.7 戊戌]^{※11} 民国になっても爵位を得ている [王公総表: 17a]。^{※12} [佐口 1995: 246–247]

〔2〕吐魯番回部。

(1) 額敏和卓の一族〈2〉、爵位は五つ。

① 額敏和卓の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	10) 額敏和卓 (Imīn Khwāja)	1732–1777	呢雅斯和卓の子	扎薩克多羅郡王
一	11) 素賚璠 (Sulaimān)	1777–1779	額敏和卓の次子	扎薩克多羅郡王
二	12) 伊斯堪達爾 (Iskandar)	1779–1811	額敏和卓の第六子	扎薩克多羅郡王
三	13) 玉努斯 (Yūnus)	1811–1814	伊斯堪達爾の長子	扎薩克多羅郡王
四	14) 丕爾敦 (Farīdūn)	1815	額敏和卓の第七子	扎薩克多羅郡王
五	15) 邁瑪薩依特 (Muḥammad Sa‘īd)	1816–1827	丕爾敦の次子	扎薩克多羅郡王
六	16) 阿克拉依都 (Aqlāīd)	1827–1872 ^{※1}	邁瑪薩依特の子	扎薩克多羅郡王
七	17) 瑪穆特 (Maḥmūd) ^{※2}	1882 ^{※3} –1900 ^{※4}	阿克拉依都の子 ^{※5}	扎薩克多羅郡王 ^{※6}
八	18) 葉明和卓 (Imīn Khwāja) ^{※7}	1901 ^{※8} –1912 ^{※9}	瑪穆特の子 ^{※10}	扎薩克多羅郡王 ^{※11}

^{※1, ※2, ※3, ※4, ※5, ※6, ※7, ※8, ※10, ※11} [清史稿 211: 8740–8742]^{※9} 民国になっても爵位を得ている [王公総表: 17a]。

② 額敏和卓の家系に増設された台吉⁽⁸⁾

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	19) 阿普哩敦 (Afrīdūn)	1825–1827	邁瑪薩依特の子	一等台吉、郡王を継承

③ 額敏和卓の家系に増設された台吉

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	20) 邁莫特伊布拉依木 (Muhammad Ibrāhīm)	1811–1812	玉努斯の長子	一等台吉
一	21) 邁瑪特瑪哈蘇特 (Muhammad Maqṣūd)	1812–1814, 1826–1827	邁莫特伊布拉依木の弟	三等台吉
二	22) 穆伯爾 (Mubār)	1848– ?	邁瑪特瑪哈蘇特の子	三等台吉

④ 額敏和卓の家系に附設された台吉

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	23) 鄂羅木咱卜 (Aurangzeb)	1766–1805	額敏和卓の第四子	公品級一等台吉
一	24) 密哩克咱特 (Malikzād)	1805–1811	鄂羅木咱卜の長子	一等台吉
二	25) 和什納扎特 (Khūshnazād)	1811–1832	密哩克咱特の子	一等台吉
三	26) 哈哩咱特 (Khalizād)	1854– ?	和什納扎特の子	三等台吉

⑤ 額敏和卓の家系に附設された台吉

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	27) 丕爾敦 (Farīdūn)	1771–1816	額敏和卓の第七子	二等台吉
一	28) 阿米特巴哈依 (Ĥamīd Bahā'ī)	1816–1825	丕爾敦の長孫	二等台吉
二	29) 鄂羅木咱普 (Aurangzeb)	1825–1828	邁瑪薩依特の子	二等台吉
三	30) 佐霍爾鼎 (Zuhūr al-Dīn)	1828– ?	額敏和卓の曾孫 ^{*1}	二等台吉

^{*1} ズフル・アッディーン・タージー・ハーキム・ベグリクについて『王公表伝』にその名は現れないとされている [新免 2009: 117] が、『王公表伝』の統纂本である『再統表伝』の「吐魯番回部」の「附二等台吉」の列傳には額敏和卓の曾孫として佐霍爾鼎 (Zuhūr al-Dīn) の名前が見える [王公表伝巻首「再統表伝」伝 11: 24a]。新免 [2009: 117] によれば、ズフル・アッディーンはエミーン・ホージャ (額敏和

⁽⁸⁾ 『欽定外藩蒙古回部王公表伝』とその統纂本には「増一等台吉」や「附一等台吉」など「増」と「附」の字が付された台吉が見られる。「増」や「附」の字が厳密に何を意味するかについては、確認できなかった。ただ、額敏和卓の家系において「増」や「附」の付された台吉を最初に与えられた者達を見ると、「増」付きの台吉を与えられているものは郡王の長子、「附」付きの台吉を与えられたものは郡王の諸子である。おそらく、郡王の長子に与えられた台吉に「増」、郡王の諸子に与えられた台吉に「附」の字が付されたと考えられる。本稿では、「増」付きの台吉を「増設された台吉」、「附」付きの台吉を「附設された台吉」と表現する。

卓)の長子であるヌール・ムハンマド・アーホンドルク(努爾邁哈默特)の次男であるミール・ターヒル・ペグリク(台爾)の息子であり、エミーヌ・ホージャの曾孫に当たる。つまり、佐霍爾鼎(Zuhūr al-Dīn)とズフル・アッディーンとは額敏和卓の曾孫であるという出自が一致し、またズフル・アッディーンの称号の「タージー」は「台吉」のことであり爵位も一致するので、同一人物と考えられる。

〔3〕居京師之回部。

(1) 霍集斯の一族〈3〉、爵位は二つ。

① 霍集斯の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	31) 霍集斯 (Khawāja sī)	1758–1781	阿濟斯和卓の子	郡王品級多羅貝勒
一	32) 哈第爾 (Qādir)	1781–1830	霍集斯の第四子	郡王品級多羅貝勒
二	33) 科克色布庫 (Kuchi Beg)	1830–1831	哈第爾の子	郡王品級多羅貝勒
三	34) 阿布都爾滿 (‘Abd al-Rahmān)	1831–1833	瑪麻達哩の次子 ^{※1}	郡王品級多羅貝勒
四	35) 邁瑪特愛孜斯 (Muhammad ‘Azīz)	1833–1842	阿布都爾滿の子	郡王品級多羅貝勒
五	36) 邁瑪第敏 (Muhammad Imīn)	1842–1863 ^{※2}	邁瑪特愛孜斯の子	郡王品級多羅貝勒
六	37) 哈的爾 (Qādir) ^{※3}	1891 ^{※4} –1912 ^{※5}	阿布都瓦哈普の子 ^{※6}	郡王品級多羅貝勒 ^{※7}

^{※1} 阿布都爾滿は、霍集斯の第五子である瑪麻達哩の次子である [回疆通志 12: 16a–b; 新疆図志 21: 2b–3a]。

^{※2, ※3, ※4, ※7} [清史稿 211: 8760–8762]

^{※5} 民国になっても爵位を得ている [王公総表: 17a]。

^{※6} 邁瑪第敏の弟の阿布都瓦哈普の子 [新疆図志 21: 2b–3a]。

② 霍集斯の家系に附設された台吉

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	38) 阿布都薩塔爾 (‘Abd al-Sattār)	1796–1823	哈第爾の養子	公品級一等台吉、停襲

(2) 和什克の一族〈4〉、爵位は一つ。

③ 和什克の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	39) 和什克 (Khūsh Kipek)	1760–1781	阿瓦斯の長子 ^{※1}	輔國公
一	40) 伊巴喇伊木 (Ibrāhīm)	1781–1805	和什克の長子	輔國公
二	41) 阿布都莫敏 (‘Abd Mu‘min)	1805–1828	伊巴喇伊木の子	輔國公

三	42) 邁瑪特熱伊木沙 (Muhammad Raḥīm Shāh)	1828–1856	阿布都拉の長子 ^{※2}	輔國公
四	43) 邁瑪特愛里 (Muhammad 'Alī) ^{※3}	1856 ^{※4} –1896 ^{※5}	邁瑪特熱伊木沙の子 ^{※6}	輔國公 ^{※7}
五	44) 木沙 (Mūsā) ^{※8}	1897 ^{※9} –1912 ^{※10}	邁瑪特愛里の子 ^{※11}	輔國公 ^{※12}

※¹ [西域同文志 11: 35b]

※² 邁瑪特熱伊木沙は和什克の第五世嫡長孫であり、祖父は木巴拉克沙、父は阿布都拉である [那奏議 78: 45b–46a, 道光 8.11.3]

※³, ※⁴, ※⁶, ※⁷, ※⁸, ※⁹, ※¹¹, ※¹² [清史稿 211: 8762–8764]

※⁵ [新疆図志 19: 9b]

※¹⁰ 民国になっても爵位を得ている [張大軍 1980: 702]。

(3) ホージャ家カラーマツト統 〈5〉、爵位は四つ。

④ 額色尹の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	45) 額色尹 (Husain)	1759–1790	墨敏の第五子 ^{※1}	鎮國公
一	46) 喀沙和卓 (Kāfshīn Khwāja)	1790–1797	額色尹の子	鎮國公
二	47) 巴巴克和卓 (Bābaq Khwāja)	1797–1842	帕爾薩の子	輔國公、停襲

※¹ [西域同文志 11: 22b]

⑤ 圖爾都の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	48) 圖爾都 (Turdu)	1759–1779	阿里和卓の子 ^{※1}	輔國公
一	49) 托克托 (Tokhti)	1779–1790	圖爾都の子	輔國公、停襲

※¹ [西域同文志 11: 23b–24a]

⑥ 禡木特の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	50) 禡木特 (Maḥmūd)	1759–1779	木薩の長子 ^{※1}	扎薩克一等台吉
一	51) 巴巴 (Bābā)	1779–1801	禡木特の長子	二等台吉
二	52) 沙音和卓 (Shāhīn Khwāja)	1801–1813	巴巴の次子	二等台吉
三	53) 阿穆爾和卓 (Amur Khwāja)	1813–1818	沙音和卓の子	二等台吉
四	54) 布咱嚕特和卓 (Buzart Khwāja)	1818–1828	阿穆爾和卓の伯父	二等台吉、停襲

※¹ [西域同文志 11:23b]

⑦ 帕爾薩の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	55) 帕爾薩 (Pārsā)	1760–1790	墨敏の第六子 ^{※1}	三等台吉
一	56) 巴巴克和卓 (Bābaq Khwāja)	1790–1842	帕爾薩の子	三等台吉、停襲

※¹ [西域同文志 11: 22b]

(4) マフドゥーミ・アーザムの次子ドースト・ホージャの子孫〈6〉、爵位は一つ。

⑧ 阿ト都爾璜の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	57) 阿ト都爾璜 (‘Abd al-Raḥmān)	1760–1772	素賚滿の子 ^{※1}	二等台吉
一	58) 阿ト都呢咱爾 (‘Abd Naṣār)	1772–1796	阿ト都爾璜の長子	三等台吉
二	59) 素賚璜 (Sulaimān)	1796–1811	阿ト都呢咱爾の長子	三等台吉、停襲

※¹ [西域同文志 11: 23a]

(5) チャガタイ・ハーン家の後裔〈7〉、爵位は一つ。

⑨ 哈什木の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	60) 哈什木 (Hāshim)	1760–1765	素勒坦阿哈木特の子 ^{※1}	一等台吉
一	61) 阿布勒 (Ghahūl)	1765–1803	哈什木の長子	二等台吉
二	62) 阿克巴什 (Aqbash)	1803–1805	阿布勒の次子	二等台吉、停襲

※¹ [西域図志 48 雜録 2: 2a]

〔4〕居新疆之回部。

(1) 鄂対の一族〈8〉、爵位は一つ。

① 鄂対の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	63) 鄂対 (Hadī)	1759–1778	頗喇特の子	貝勒品級固山貝子
一	64) 鄂斯璜 (‘Uthmān)	1778, 1784–1788	鄂対の長子	散秩大臣兼固山貝子
二	65) 邁哈默特鄂三 (Muḥammad Ḥusain)	1788–1824	鄂斯璜の長子	散秩大臣兼固山貝子
三	66) 邁哈默特鄂隊 (Muḥammad Hadī)	1824–1826	邁哈默特鄂三の養子	散秩大臣兼固山貝子
四	67) 伊薩克 (Ishāq)	1826–1842	鄂斯璜の次子 ^{※1}	散秩大臣兼多羅郡王
五	68) 愛瑪特 (Aḥmad)	1842–1864	伊薩克の長子 ^{※2}	散秩大臣兼多羅郡王

六	69) 阿密特 (Ĥamīd) ^{※3}	1883 ^{※4} –1894 ^{※5}	愛瑪特の子 ^{※6}	多羅郡王 ^{※7}
七	70) 瑪木特 (Maĥmūd) ^{※8}	1895 ^{※9} – ?	阿密特の子 ^{※10}	多羅郡王 ^{※11}
八	71) 賈買的敏 (Muĥammad Imīn) ^{※12}	? – 1912 ^{※13}	瑪木特の子 ^{※14}	多羅郡王 ^{※15}

※¹ [回疆通志 12: 11a]

※^{2, ※6} [新疆図志 21: 5a]

※^{3, ※4, ※5, ※7, ※8, ※9, ※10, ※11} [清史稿 211: 8773–8775]

※^{12, ※15} [宣統実録 63: 42b, 宣統 3.9 甲申]

※¹³ 民国になっても爵位を得ている [王公総表 : 17a]。

※¹⁴ [許福蘆 2006: 217]

(2) 色提卜阿勒氏の一族 〈9〉、爵位は一つ。

② 色提卜阿勒氏の家系

継承 回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	72) 色提卜阿勒氏 (Satip Aldi)	1763–1788	齊里克の子	貝子品級輔國公
一	73) 邁黙特阿卜都拉 (Muĥammad ‘Abd Allāh)	1788–1804	色提卜阿勒氏の長子	貝子品級輔國公
二	74) 邁瑪特愛散 (Muĥammad Ḥasan)	1805–1820	邁黙特阿卜都ラの長子	貝子品級輔國公
三	75) 邁瑪特愛瑪特 (Muĥammad Aĥmad)	1820–1843	邁瑪特愛散の弟	貝子品級輔國公
四	76) 邁瑪特愛散 (Muĥammad Īsā)	1843–1861 ^{※1}	邁瑪特愛瑪特の子	貝子品級輔國公
五	77) 哈迪爾 (Qādir) ^{※2}	? – ?	不明	貝子品級輔國公 ^{※3}
六	78) 依不拉引 (Ibrāhīm) ^{※4}	? – ? ^{※5}	不明	貝子品級輔國公 ^{※6}

※¹ 咸豊 11 年にウシュのハーキム・ベクの邁瑪特愛散が亡くなっている [宮中檔奏摺 406013925 号「奏報調補烏什四品阿奇木伯克員缺以順輿情事」]。先行研究にて咸豊 9 年に貝子品級輔國公邁瑪特愛散がウシュのハーキム・ベクに任命されたことが指摘されており [堀 2003: 21–22]、同人の死去と見てよいと思われる。

※^{2, ※3, ※4, ※6} [清史稿 211: 8775–8778]

※⁵ 依不拉引は民国 3 年に爵位を継承したという [王公総表 : 17a; 張大軍 1980: 701] が、『清史稿』の「居新疆之烏什回部貝子品級輔國公」の藩部世表には依不拉引の名があり [清史稿 211: 8775–8778]、彼が民国期に入ってから初めて爵位を継承したのか、清代から爵位を継承していたのか判然としない。

(3) 噶岱默特一族 〈10〉、爵位は一つ。

③ 噶岱默特の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	79) 噶岱默特 (Gadāy Muḥammad)	1759–1775	阿卜都拉の子 ^{※1}	公品級
一	80) 阿卜都喇璊 (‘Abd al-Raḥmān)	1775–1776	噶岱默特の子	公品級
二	81) 邁瑪第敏 (Muḥammad Imīn)	1776–1796	阿卜都喇璊の子	公品級
三	82) 邁默特伊巴拉伊木 (Muḥammad Ibrāhīm)	1797–1828	邁瑪第敏の子	公品級
四	83) 木薩 (Mūsā)	1828–1837	邁默特伊巴拉伊木の弟 ^{※2}	輔國公
五	84) 邁瑪塔哩普 (Muḥammad Tālib)	1837– ? ^{※3}	木薩の子	輔國公
六	85) 愛瑪特 (Aḥmad) ^{※4}	1859 ^{※5} –1900 ^{※6}	邁瑪塔哩普の子 ^{※7}	輔國公 ^{※8}
七	86) 司地克 (Šiddīq) ^{※9}	1901 ^{※10} –1912 ^{※11}	愛瑪特の子 ^{※12}	輔國公 ^{※13}

※1 [回疆通志 12: 11a]

※2 [那奏議 78: 46a–b, 道光 8.11.3]

※3 没年は確認できなかったが、咸豊9年には故人となっている [文宗実録 285:23b, 咸豊 9.6 乙巳]

※4, ※5, ※8 [清史稿 211: 8778–8779]

※6, ※7, ※9, ※10, ※12, ※13 [新疆図志 21: 1a–b]

※11 民国になっても爵位を得ている [王公総表 : 17a]。

(4) 薩里の一族 〈11〉、爵位は一つ。

④ 薩里の家系

継承回数	人名	在位年代	血統	爵位の変遷
初	87) 薩里 (Šālih)	1762–1775	不明	三等輕車都尉
一	88) 海色木 (Qāsīm)	1775–1815	薩里の子	三等輕車都尉
二	89) 愛里木 (Ālim)	1815–1840	海色木の子	三等輕車都尉
三	90) 阿布都瓦依特 (‘Abd al-Waḥīd)	1840– ?	愛里木の子	三等輕車都尉

これら王公の一族は、おおまかに分ければヤルカンド・ハーン国時代のハーン家やアミールないしはベグなどの世俗的な有力者の家系か、ホージャやアホンなどのイスラームを背景

とした宗教的な有力者の家系の出身者達である⁽⁹⁾。そして、ホージャ家とハーン家の者を除くと、彼らは、ジュンガルの脅威を受けた後に清朝へ庇護を求めて帰順し、その後、自己の回部における権力の保持ないし再興のためにカシュガル・ホージャ家白山党のブルハヌッディーンと弟のホージャ・ジャハーン（いわゆるホージャ兄弟）征討を目的とする清朝の回部征服に参加し、功績を挙げた者達である⁽¹⁰⁾。

そして、これらの者達の中でハーン家やホージャ家の旧君主層、また清朝から忠誠を疑われたと思われる霍集斯と和什克の一族が北京に留置され、居京師之回部となったのである⁽¹¹⁾。他の者達は、まず哈密回部と吐魯番回部が扎薩クの地位を保証され、扎薩克制による支配を行い、また居新疆之回部はバク制度下でバクに任命され、行政を担った。

第二章 諸都市のハーキム・バク職と王公一族

本章では諸都市のハーキム・バクに王公一族がどの程度任用されているのかを確認する。『欽定回疆則例』⁽¹²⁾ 巻一に載る各城の「額設阿奇木伯克等官」には、カシュガル、ヤルカンド、アクス、ヤンギ・ヒサル、ホータン、ウシュ、サイラム、バイ、クチャ、シャヤル、コルラ、ブグル、トルファン（ロプノール）、イリに設置されたバク職が記されている〔回疆則例 1: 1a-22b〕。この内、トルファン（ロプノール）にはハーキム・バクが設置されていない。その他の都市には三品（カシュガル、ヤルカンド、アクス、ホータン、クチャ、サイラム、シャヤル、コルラ、ブグル、イリ）、四品（ウシュ、バイ、ヤンギ・ヒサル）のハーキム・バクが設置されている。四品のハーキム・バクは、カシュガルやホータン所属の城荘にも設

⁽⁹⁾ 額貝都拉の出身については佐口 [1995: 213-214]、額敏和卓の出身については佐口 [1986: 171]、霍集斯の出身については Hamada [1978: 91-92]、和什克の出身については佐口 [1963: 58-59]、ホージャ家カラーマツト統の出身については佐口 [1963: 80-85]、マフドゥーミ・アーザムの次子ドースト・ホージャの子孫の出身については佐口 [1963: 87-89]、チャガタイ・ハーン家の後裔の出身については佐口 [1975: 373-375]、鄂対の出身については Kim [2004: 37] は、色提卜阿勒底の出身については佐口 [1963: 57-58]、噶岱默特的出身については佐口 [1963: 58] を参照。

⁽¹⁰⁾ このような清朝側に加担した現地有力者の動向については、佐口 [1963: 11-66] に詳しい。

⁽¹¹⁾ 霍集斯の留京については佐口 [1963: 64-65]、和什克の留京については Fletcher [1995: 171]、ホージャ家カラーマツト統の留京については佐口 [1963: 85]、マフドゥーミ・アーザムの次子ドースト・ホージャの子孫の留京については佐口 [1963: 87-89]、チャガタイ・ハーン家の後裔の留京については佐口 [1975: 375] を参照。

⁽¹²⁾ 加藤 [1991: 615-618] によれば、『欽定回疆則例』は回部の行政上に生じた事例を集めて編纂したものであり、嘉慶 17 年に原修本が完成し、道光 5 年、道光 13 年に改定が行われ、道光 23 年に現修本が完成した。筆者が利用したのは、加藤 [1991: 620] が「a 本」と呼んだ漢文本で、現修本である。

置されているが、ウシュ、バイ、ヤンギ・ヒサルについては他の都市と同様に独立した項目が『回疆則例』巻一に立てられており、品級は四品ながら他の三品ハーキム・ベクの属下ではなかったようであるため、三品のハーキム・ベクと同様に考察の対象とする。なお、カシュガル、ヤルカンド、アクスの三都市のハーキム・ベクについては、『回疆則例』の規定によって爵位を持つ者が優先的に任命されるとの先行研究の指摘があるが[佐口 1963: 150; 苗 1995: 31]、この規定の実効性を実証した研究は見当たらない。

これら 13 都市のハーキム・ベクの内、イリのハーキム・ベクはイリの都市行政ではなくイリのタランチ回屯の管理を担っており[佐口 1986: 281]、他のハーキム・ベクとはその性格が若干異なる。さらに、イリは天山北路に位置して回部の都市ではないということも考慮し、本稿においてはイリのハーキム・ベクについては考察の対象としない。また、イリのハーキム・ベクに額敏和卓の第四子である鄂羅木咱卜(Aurangzeb)の子孫が世襲的に任用されていることが、先行研究により明らかにされている[佐口 1986: 283]。よって、本稿ではイリを除いた 12 都市の三四品のハーキム・ベクに王公一族がどの程度任用されているかを確認する。

以下は、筆者が見出し得た 12 都市のハーキム・ベク職の就任者をリスト化したものである。12 都市の内、カシュガル、ヤルカンド、アクスのハーキム・ベクについては公刊史料からもかなりの情報を抽出することができ、これら 3 都市のハーキム・ベクについては、人名、就任期間、任職年数、血統を示した。残りの 9 都市のハーキム・ベクについては、公刊史料から十分な情報を抽出することはできず、人名⁽¹³⁾、ハーキム・ベクを見出した史料の記述の年次、血統を示した。さらに繁雑を避けるため、王公一族の任用が少ない都市のハーキム・ベクについては任用された王公一族のみをリストにして示した。リストの凡例は以下のとおりである。

- ①便宜的に各ハーキム・ベクに対して年代順に番号を付したが、その番号はハーキム・ベクの就任順を示したものではない。
- ②本リストに掲げられた人物のうち、前章のリストに掲載された回部王公と同じ人物と考えられるものについては、前章のリストでその人物に付された通し番号と同じ番号を本リストの人物名の前にも付した。
- ③就任期間や任職年数の数字の後に「？」を記したものは、その数字が推測であることを表しており、「？」が単独で記されている場合は、就任期間や任職年数が確認できなかったことを表している。また、血統が確認できなかった場合は「不明」と記した。
- ④これらのリストにおいては、その典拠もリスト内に組み込んだ。カシュガル、ヤルカ

⁽¹³⁾ 『王公表伝』と『回疆通志』に載る回部王公の一族については、人名の表記をこの二史料に拠って統一した。

ンド、アクスのハーキム・ベクのリストにおいては、就任と退任の年を示した年号の後の[]内と、血統の後の[]内がその典拠である。その他の9都市のハーキム・ベクのリストにおいては、年次の後の[]内と血統の後の[]内に、その典拠を示した。また、典拠を示すだけでは不十分な箇所には、脚注を付して補足を加えた。

⑤繁雑を避けるために、典拠に載せた史資料には以下の記号を使用した。

A= 王公表伝四庫全書 B= 王公表伝巻首「本表伝」 C= 王公表伝巻首「初続表伝」
D= 王公表伝巻首「再続表伝」 E= 王公表伝巻首「三続表伝」 F= 高宗実録 G= 仁宗実録 H= 宣宗実録 I= 文宗実録 J= 穆宗実録 K= 嘉慶朝上諭檔 L= 道光朝上諭檔 M= 咸豊朝上諭檔 N= 同治朝上諭檔 O= 準略 P= 逆略 Q= 陝甘新疆方略 R= 那奏議 S= 布彦泰葉爾羌奏稿 T= 慶固奏稿 U= 欽定西域同文志 W= 回疆通志 X= 新疆識略 Y= 新疆図志 Z= 清代辺疆満文檔案目録新疆巻 α= 聂・王 2002 β= 堀 2003 γ= Kim 2004 δ= 小沼 2007 ε= 『附編の研究』 ζ= 新免 2009 TH= *Tarikhi Hāmidi*

(1) カシュガルのハーキム・ベク⁽¹⁴⁾

番号	人名	就任期間	任職年数	血統
1	茂薩 ^{*1} (Mūsā)	1759[A110: 10a-b] -1760[A110: 12a]	1	10) 額敏和卓の第三子 [A110: 10a-b; W12:7a]
2	79) 噶岱默特 (Gadāy Muḥammad)	1760[A120: 3a] -1775[A 120: 7b]	15	阿卜都拉の子 [W12: 11a]
3	72) 色提卜阿勒氏 (Satip Aldi)	1775[A119: 5a] -1778[A119: 5b]	3	齊里克の子 [A119: 1a]
4	64) 鄂斯璘 (‘Uthmān)	1778[A118: 11a] -1788[A118: 12a]	10	63) 鄂対の長子 [A118: 9b]
5	12) 伊斯堪達爾 (Iskandar)	1788[A110: 21a-b] -1811[C 伝 11:21a]	23	10) 額敏和卓の第六子 [W12: 7a]
6	13) 玉努斯 (Yūnus)	1811[C 伝 11: 21a] -1814 ^{*2}	3	12) 伊斯堪達爾の長子 [C 伝 11: 21a]
7	玉素卜 (Yūsuf)	1814 ^{*3} -1815[G311: 15a, 嘉慶 20.10 壬申]	1	阿克伯克の長子 [c: 177; W12: 9b]
8	67) 伊薩克 (Ishāq)	1815[α: 43] -1816[G317: 10a-b, 嘉慶 21.3 庚寅]	1	64) 鄂斯璘の次子 [δ: 178; W12: 11a]

⁽¹⁴⁾ カシュガルのハーキム・ベクの内、茂薩から佐霍爾鼎までのハーキム・ベクの出自、任用、退任については新免 [2009: 112-113] が既に明らかにしている。本稿では、佐霍爾鼎以降のカシュガルのハーキム・ベクについても扱った。

9	額依默爾 (‘Umar)	1816[α: 43] –1820[H10: 20a, 嘉慶 25.12 壬辰]	4	63) 鄂対の姪 [α: 43; 注を参照 ^{*4}]
10	15) 邁瑪薩依特 (Muḥammad Sa‘īd)	1821[ε: 179] –1826[D 伝 11:19b]	5	14) 丕爾敦の次子 [D 伝 11:19a–b]
11	67) 伊薩克 (Ishāq)	1827[ε: 181–2; P52: 10b, 道光 7.10 巳卯] –1831[H193: 10b, 道光 11.7 癸酉]	4	64) 鄂斯璜の次子 [W12: 11a]
12	30) 佐霍爾鼎 (Zuhūr al-Dīn)	1831[ε: 184; H195: 15a–b, 道光 11.8 壬寅] –1848[L28: 105]	17	10) 額敏和卓の曾孫 [ζ: 117; D 伝 11: 24a]
13	邁瑪特 (Muḥammad)	1848[L28: 105] –1856[α: 44; 注を参照 ^{*5}]	8	67) 伊薩クの次子 [(H193: 10b, 道光 11.7 癸酉; Q4: 13b, 咸豊 7.7 壬寅)]
14	68) 愛瑪特 (Aḥmad)	1856[α: 44; 注を参照 ^{*6}] –1857[L235: 22a, 咸豊 7.9 丙戌]	1	67) 伊薩クの長子 [H193: 10b, 道光 11.7 癸酉; Q4:13b, 咸豊 7.7 壬寅; E 伝 12:14b]
15	阿里 (‘Alī)	1858[M8: 7] –1859[M9: 516]	1	不明
16	庫吐魯克 (Qutluq)	1859[M9: 516] –1864[γ: 65]	5	不明

^{*1} 茂薩はハーキム・ベクの署理を任されている [王公表伝四庫全書 110: 10a–b] が、正規のハーキム・ベクへの任命は漢文史料から確認できなかった。しかし、『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編には彼がハーキム職に就いたことが記されている [附編の研究: 169]。また、署理とはいえ茂薩が清朝によってカシュガルに配置された最初のハーキム・ベクと考えられるため、リストに加えた。

^{*2} 嘉慶 19 年 2 月初 6 日に玉努斯の革職が検討されており [嘉慶朝上諭檔 19: 49–50]、さらに同年の同じ月の 24 日の上諭では玉努斯は「喀什噶爾已革阿奇木伯克玉努斯」とされており [嘉慶朝上諭檔 19: 98]、この間に革職されたとみられる。また、附編からもこの時期に玉努スが解任されたことを確認できる [附編の研究: 177]。

^{*3} 玉努スが革職されたと見られる嘉慶 19 年、その年の 2 月 30 日の上諭に「喀什噶爾阿奇木伯克玉素普」とあり [嘉慶朝上諭檔 19: 111]、玉素トのカシュガルのハーキム・ベクへの就任は嘉慶 19 年のことと考えられる。また、附編においてもユヌス・ワン・ベグリク (玉努斯) の後任のカシュガルのハーキム・ベクはユスフ・ベグ (玉素ト) とされている [附編の研究: 177]。

^{*4} 軍機処檔摺からも額依默爾が鄂対の姪であることが確認できる [軍機処檔摺 047510 号「奏報欽遵諭旨遴選喀什噶爾阿奇木伯克員缺」]。

^{*5} 宮中檔奏摺からも咸豊 6 年にカシュガルのハーキム・ベク職が邁瑪特の病により出缺していることが確認できる [宮中檔奏摺 406007821 号「為阿奇木伯克因病出缺請旨揀員調補事」]。

^{*6} 宮中檔奏摺からも咸豊 6 年にカシュガルのハーキム・ベクに愛瑪特を任命することが上奏され、皇帝の裁可を得ていることが確認できる [宮中檔奏摺 406007821 号「為阿奇木伯克因病出缺請旨揀員調補事」]。

以上のリストに示した血統から、筆者が見出し得たカシュガルのハーキム・ベク職の就任

者 16 人の内、14 人が王公一族であることがわかる。そして、就任者の内の多くを額敏和卓の一族と、鄂対の一族が占めることも確認できた。さらに就任期間の長さを見ると、額敏和卓の一族が、合算すると約半世紀ほどハーキム・ベクとしてカシュガルを統治したことになる。

(2) ヤルカンドのハーキム・ベク

番号	人名	就任期間	任職 年数	血統
1	39) 和什克 ^{※1} (Khūsh Kipek)	1759[B117: 1b-2a] -1760[B117: 2a]	1	阿瓦斯的長子 [U11: 35b]
2	63) 鄂対 (Hadī)	1760[A118: 6b] -1778[A118: 7b]	18	頗喇特の子 [A118: 1a]
3	72) 色提卜阿勒氏 (Satip Aldi)	1778[A119: 5b] -1788[A119: 6a]	10	齊里克の子 [A119: 1a]
4	阿克伯克 (Aq Beg)	1788[W12: 9b] -1804[W12: 9b]	16	72) 色提卜阿勒氏の弟 [W12: 9a]
5	73) 邁默特阿卜都拉 (Muḥammad ‘Abd Allāh)	1804[W12: 8b] -1804[C 伝 12: 19a]	1 年 未滿	72) 色提卜阿勒氏の長子 [A119: 6b]
6	13) 玉努斯 (Yūnus)	1805 ^{※2} [Z: 2285] -1811 ^{※3}	6	12) 伊斯堪達爾の長子 [ε: 175-176; C 伝 11: 21a]
7	65) 邁哈默特鄂三 (Muḥammad Husain)	1811[α: 43] -1824[D 伝 12: 16a]	13	64) 鄂斯瑞の長子 [A118: 12b]
8	玉素卜 (Yūsuf)	1824 ^{※4} -1827[H116: 27b, 道光 7.4 辛酉]	3	阿克伯克の長子 [TH: 132; W12: 9b]
9	34) 阿布都爾滿 (‘Abd al- Raḥmān)	1827[H116: 35a, 道光 7.4 甲子] -1833 ^{※5}	6	瑪麻達哩の次子 [W12: 16a-b; Y21: 2b-3a]
10	伊斯瑪依爾 (Ismā‘īl)	1833[L13: 594] -1850[L30: 182]	17	12) 伊斯堪達爾の次子 [注を参照 ^{※6} ; W12: 7b]
11	68) 愛瑪特 (Aḥmad)	1850[L30: 182; S: 17b] -1852[I65: 17a-b, 咸豐 2.7 戊午]	2	67) 伊薩克の長子 [Y21: 5a]
12	16) 阿克拉依都 (Aqlaīd)	1853[M3: 15; S: 25a-b] -1862[J25: 45a-46a, 同治 1.4 辛未]	9	15) 邁瑪薩依特の長子 [D 伝 11: 19b; E 伝 11: 20a]
13	如斯塔木 (Rustam)	1863[N2: 155] - ? ^{※7}	?	不明

^{※1} 和什克はハーキム・ベクの署理を任されている [王公表伝巻首, 「本表伝」117: 1b-2a] が、正規のハーキム・ベクへの任命は漢文史料から確認できなかった。しかし、署理とはいえ和什克が清朝によってヤルカンドに配置された最初のハーキム・ベクと考えられるため、リストに加えた。

^{※2} 嘉慶 10 年 6 月に「葉爾羌辦事達慶等奏玉努斯接任葉爾羌阿奇木伯克摺」という檔案があり [目録: 2285]、この年に玉努スはヤルカンドのハーキム・ベクに就任したと考えられる。

^{※3} 附編には、ヤルカンドのハーキム・ベクであったユーヌス・ワン・ベグリクが父であるイスカンドル・ワン・ベグリク (伊斯堪達爾) の死去に伴い、カシュガルのハーキム・ベクとなった様子が描かれている [附

編の研究：175–176]。すでに本文中で述べたように、玉努斯のカシュガルのハーキム・ベク就任は1811年であるから、彼がヤルカンドのハーキム・ベクの職を離れたのも同年と考えられる。

※⁴ 道光4年9月に「葉爾羌辦事大臣特依順保等奏玉素布謝授葉爾羌阿奇木伯克摺」という檔案があり[目録：2607]、この年に玉素トがヤルカンドのハーキム・ベクになったと考えられる。

※⁵ 軍機処檔摺 065996 号「奏報葉爾羌阿奇木伯克因病出缺」

※⁶ 軍機処檔摺 065992 号「奏請以伊斯瑪依爾調葉爾羌阿奇木伯克(摺片)(附清單)」；軍機處檔摺 065992 号 附件1

※⁷ 如斯塔木がヤルカンドのハーキム・ベク職から離れた年を確認することはできなかったが、同治3年に彼をサイラムのハーキム・ベクに転任させ、ヤルカンドのハーキム・ベクに邁瑪特阿普都拉を推す提案が為されている[軍機処檔摺 095285 号「奏為改調葉爾羌三品阿奇木伯克等由」]。

以上のリストに示した血統から、筆者が見出し得たヤルカンドのハーキム・ベク職の就任者13人の内、12人が王公一族であることがわかる。そして、就任者の内の多くを額敏和卓の一族、鄂対の一族、色提卜阿勒氏(Satip Aldi)の一族といった三つの家系が占めることも確認できた。また就任期間の長さを合算すると、これらの一族がそれぞれ30年ほど勤めている。

(3) アクスのハーキム・ベク

番号	人名	就任期間	任職年数	血統
1	63) 鄂対 (Hadī) ※ ¹	1758[δ: 45–46]–1760[A118: 6b]	2	頗喇特の子 [A118: 1a]
2	72) 色提卜阿勒氏 (Satip Aldi)	1760[A119: 2b]–1775[A119: 5a]	15	齊里克の子 [A119: 1a]
3	64) 鄂斯璊 (‘Uthmān)	1775[A118: 10b]–1778[A118: 11a]	3	63) 鄂対の長子 [A118: 9b]
4	阿克伯克 (Aq Beg)	1778[W12: 9b]–1788[W12: 9b]	10	72) 色提卜阿勒氏の弟 [W12: 9a]
5	73) 邁默特阿卜都拉 (Muḥammad ‘Abd Allāh)	1788[A119: 6b]–1804[W12: 8b]	16	72) 色提卜阿勒氏の長子 [A119: 6b]
6	玉素ト (Yūsuf)	1804[W12: 9b]–1814 ? ※ ²	10 ?	阿克伯克の長子 [W12: 9b]
7	67) 伊薩克 (Ishāq)	1814 ※ ³ –1815 ※ ⁴	1	64) 鄂斯璊の次子 [P14: 8b, 道光 6.7 戊戌 ; P16: 9b, 道光 6.7 戊申]
8	額依默爾 (‘Umar)	1816[Z: 2481]–1816[α: 43]	1 年 未滿	63) 鄂対の姪 [α: 43]
9	巴彥岱 (Pāyanda)	1816[Z: 2490]–1824[H75: 38a–b, 道光 4.11 乙卯]	8	不明
10	66) 邁哈默特鄂隊 (Muḥammad Hadī)	1825[Z: 2620]–1826[H106: 20b, 道光 6.9 申丑]	1	65) 邁哈默特鄂三の養子 [D 伝 12: 16a]

11	67) 伊薩克 (Ishāq)	1826[P16: 12a, 道光 6.8 乙丑] –1827[H114: 36b–37b, 道光 7.2 壬申]	1	64) 鄂斯瑞の次子 [W12: 11a]
12	68) 愛瑪特 (Aḥmad)	1827[H114: 36b–37b, 道光 7.2 壬申]–1850[S: 17b]	23	67) 伊薩克の長子 [Y21: 5a]
13	伊布拉依木 (Ibrāhīm)	1850[L30: 381]–1855 ^{※5}	5	不明
14	68) 愛瑪特 (Aḥmad)	1855 ^{※6} –1856 ^{※7}	1	67) 伊薩克の長子 [Y21: 5a]
15	69) 阿密特 (Ḥamid)	1856[M6: 258]–1860[I330: 38a–b, 咸豐 10.9 乙己]	3	68) 愛瑪特の子 [Y21: 5a]
16 ^{※8}	薩依提 (Sa‘īd)	1863[N2: 155]–1864[γ: 60]	1	不明

※¹ 小沼 [2007: 45–46] によれば、1758 年にアクスが帰順した際に、鄂対はアクスの総管とされた。『王公表伝』が、これをアクスのハーキム・ベクへの任命としている [王公表伝四庫全書 118: 2b] 点を鑑みて、リストに加えた。

※² 嘉慶 18 年 5 月に「阿克蘇辦事大臣托雲奏報阿克蘇阿奇木伯克玉素甫謝賞綢緞之恩摺」という檔案があり [目録: 2429]、この年まで在任していたと考えられる。すでに述べたように、玉素甫は嘉慶 19 年にカシュガルのハーキム・ベクになっている。おそらく、同年まではアクスのハーキム・ベクの職にあったであろう。

※³ 嘉慶 19 年 5 月に「伊犁將軍松筠奏將伊犁阿奇木伯克伊薩克調任阿克蘇阿奇木伯克并賞遷家所需銀兩賞」という檔案があり [目録: 2446]、この年に伊薩克はアクスのハーキム・ベクに転任したと見られる。

※⁴ 嘉慶 20 年 5 月に「阿克蘇辦事大臣楊樹曾奏阿克蘇阿奇木伯克伊薩克貢馬匹等物摺」という檔案があり [目録: 2463]、この年まで在任していたと考えられる。すでに述べたように、伊薩克は同年にカシュガルのハーキム・ベクとなっており、この年にアクスのハーキム・ベク職を離れたと見られる。

※⁵ 咸豐 5 年にアクスのハーキム・ベクの伊布拉依木をクチャのハーキム・ベクに転任することが上奏され、皇帝の裁可を得ている [宮中檔奏摺 406006492 号「奏為賽里木阿奇木伯克身體軟弱呈請開缺並揀員調補先行委署以資治理事」]。

※⁶ 咸豐 5 年に郡王愛瑪特をアクスのハーキム・ベクに任命することが上奏され、皇帝の裁可を得ている [宮中檔奏摺 406006492 号「奏為賽里木阿奇木伯克身體軟弱呈請開缺並揀員調補先行委署以資治理事」]。

※⁷ 咸豐 6 年 3 月の上諭の中に「阿克蘇阿奇木伯克回子郡王愛瑪特」とあり [咸豐朝上諭檔 6: 77]、この年の在任を確認できる。同年に阿密特がアクスのハーキム・ベクに任命されており [咸豐朝上諭檔 6: 258]、愛瑪特はこの年にアクスのハーキム・ベク職を離れたと考えられる。

※⁸ 15 番の阿密特と 16 番の薩依提との間の 1860–63 年の間については正規のハーキム・ベクを史料中から見出すことはできず、署理として烏述爾と斯瑪依爾という二人の人物が見出せるのみである [同治朝上諭檔 1: 29]。

以上のリストに示した血統から、筆者が見出し得たアクスのハーキム・ベク職の就任者 16 人の内、13 人が王公一族であることがわかる。そして、就任者の内の多くを鄂対の一族

と色提卜阿勒氏一族が占めることも確認できた。さらに就任期間の長さを見ると、色提卜阿勒氏一族が乾隆朝から嘉慶朝にかけて合算すると半世紀に近い年月の間、アクスのハーキム・ベク職を務めている。

(4) ホータンのハーキム・ベク

番号	人名	年次	血統
1	31) 霍集斯 (Khwāja sī)	乾隆 24[B116: 6a]	阿濟斯和卓の子 [B116: 1a]
2	阿什默特 (Hāshi Muḥammad)	乾隆 25[F608:12a, 乾隆 25.3 癸丑]	不明 ^{※1} 、公 [O 正編 77: 26b, 乾隆 24.9 辛亥]
3	阿瓜斯伯克 (‘Awāz Beg)	乾隆 33[F825: 9b, 乾隆 33.12 乙亥]	不明
4	邁底雅爾 (Muḥammad Yār)	乾隆 43[F1069: 11b, 乾隆 43.10 乙亥]	不明
5	阿里木沙 (Alīm Shāh)	乾隆 47[F1171: 21a, 乾隆 47.11 辛卯]	不明
6	愛資雅爾 (Hajj Yār)	乾隆 47[F1171: 21a, 乾隆 47.11 辛卯]	不明
7	81) 邁瑪第敏 (Muḥammad Imīn)	乾隆 54[F1322: 24b, 乾隆 54.2 巳亥]	80) 阿卜都喇璘の長子 [A120: 8a]
8	穆喇特伯格 (Murād Beg)	乾隆 57[F1398: 9a, 乾隆 57.3 丙子]	64) 鄂斯璘の弟 ^{※2}
9	額澤斯 (‘Azīz)	乾隆 57[Z: 2040]	不明
10	伊斯邁爾 (Ismā‘īl)	嘉慶 11[Z: 2308]	不明
11	木巴拉普沙 (Mubārak Shāh)	道光 6[P18: 5a, 道光 6.8 丁巳]	42) 邁瑪特熱依木沙の祖父 [R78: 45b–46a, 道光 8.11.3]
12	伊斯瑪依勒 (Ismā‘īl)	道光 9[P77: 18a–b, 道光 9.2 乙丑]	12) 伊斯堪達爾の子 [注を参照 ^{※3} ; W12: 7b]
13	35) 邁瑪特愛孜斯 (Muḥammad ‘Azīz)	道光 18[H316: 27b, 道光 18.11 己未]	34) 阿布都爾滿の子 [T: 611–613, 咸豐 8.12.28; E 伝 12: 10b]
14	邁瑪特 (Muḥammad)	道光 22[L22: 208]	67) 伊薩克の次子 ^{※4}
15	阿里 (‘Alī)	咸豐 6[I216: 22b, 咸豐 6.12 壬子]	不明
16	36) 邁瑪第敏 (Muḥammad Imīn)	咸豐 11[J2: 27b, 咸豐 11.8 戊辰]	35) 邁瑪特愛孜斯の子 ^{※5}
17	呢雅斯 (Niyāz)	同治 3[N3: 95]	不明

※1 阿什默特の血統は確認できなかったが、烏什右姓（ウシュの有力者）であるという [西域図志卷首 4: 13a–b]。阿什默特については、真田 [1983: 450–451]、鄒礼洪 [1995: 17–18] に詳しい。なお、阿什默特の名は『王公表伝』には見えない。この事は、彼の爵位が『王公表伝』の作成前に何らかの理由で削られたか、もしくは、その爵位の世襲が許されなかったということを示唆している。

※2 まず、乾隆 45 年にクチャのハーキム・ベクに穆喇特伯格が任命されており [高宗実録 1111: 21a, 乾隆 45.7 乙巳]、この穆喇特伯格はカシュガルのハーキム・ベクの鄂斯璘の弟である [目録: 1472]。さらに、乾隆 54 年に「庫車辦事大臣秀林奏新授和田阿奇木伯克穆拉特伯格依謝恩並請准其子戴金頂隨任摺」という檔案があり [目録: 1900]、この年に穆喇特伯格という人物がホータンのハーキム・ベクに任命されたと見られる。さらに、同年に「喀什噶爾參贊大臣明亮奏請將和田伯克買瑪第敏補放庫車阿奇木伯克摺」という檔案があり [目録: 1903]、クチャのハーキム・ベクが缺出していることがわかる。これは、クチャ

のハーキム・ベクの穆喇特伯格がホータンのハーキム・ベクに転任したために、クチャのハーキム・ベクが缺出したと考えられ、クチャのハーキム・ベクの穆喇特伯格とホータンのハーキム・ベクの穆喇特伯格は同一人物だと思われる。

※³ 軍機処檔摺 065992 号「奏請以伊斯瑪依爾調葉爾羌阿奇木伯克 (摺片) (附清單)」

※⁴ 軍機処檔摺 081564 号「奏為伯克作霍爾敦年老昏庸請旨勒休由」

※⁵ 邁瑪特愛孜斯の子であり、郡王銜貝勒を継承した邁瑪第敏がホータンのハーキム・ベクに推薦されており [慶固奏稿: 617-622, 咸豐 8.12.28]、さらに咸豐 9 年にホータンのハーキム・ベクに邁瑪第敏を任命するという上諭がある [咸豐朝上諭檔 9: 62]。それ故にホータンのハーキム・ベクの邁瑪第敏は、邁瑪特愛孜斯の子であると考えられる。

以上のリストに示した血統から、筆者が見出し得たホータンのハーキム・ベク職の就任者 17 人の内、8 人が王公一族であることがわかる。ホータンのハーキム・ベクの半数近くが王公一族であることを確認できた。この内、霍集斯の一族が 3 人とやや多い。

(5) クチャのハーキム・ベク

番号	人名	年次	血統
1	64) 鄂斯璊 (‘Uthmān)	乾隆 23[A118: 9b]	63) 鄂対の長子 [A118: 9b]
2	阿克伯克 (Aq Beg)	乾隆 40[W12: 9a]	72) 色提卜阿勒氏弟 [W12: 9a]
3	阿都哩蒂卜 (‘Abd al-Laṭīf)	乾隆 44[F1096: 7b, 乾隆 44.12 乙卯]	不明
4	阿里雅爾 (‘Alī Yār)	乾隆 45[Z: 1443]	不明
5	穆喇特伯格 (Murād Beg)	乾隆 45[F1111: 21a, 乾隆 45.7 乙巳]	64) 鄂斯璊の弟 ^{※1}
6	81) 邁瑪第敏 (Muḥammad Imīn)	乾隆 56[Z: 1972]	80) 阿都哩蒂卜の長子 ^{※2}
7	65) 邁哈默特鄂三 (Muḥammad Husain)	嘉慶 2[F1497: 4a, 嘉慶 2.7 壬子]	64) 鄂斯璊の長子 [W12: 11a; A118: 12b-13a]
8	愛穆爾 (‘Umar)	嘉慶 16[Z: 2406]	63) 鄂対の姪 ^{※3}
9	胡達巴爾第 (Khudā Berdī)	道光 7[P37: 15b, 道光 7.1 丁酉]	67) 伊薩克の娘婿 [R78: 4a-b, 道光 8.9.15]
10	邁瑪第敏 (Muḥammad Imīn)	道光 15[L15: 288]	不明
11	額則斯 (‘Azīz)	道光 17[L17: 239-240]	不明
12	皮魯斯 (Pīrūz)	道光 20[L20: 197]	不明
13	邁瑪斯底克 (Muḥammad Šiddīq)	道光 28[L28: 434]	不明
14	伊布拉依木 (Ibrāhīm)	咸豐 5 ^{※4}	不明
15	庫爾班 (Qurbān)	咸豐 6[M6: 339]	不明

※¹ 乾隆 45 年に「庫車辦事大臣景福奏代新授庫車阿奇木伯克穆拉特伯格依謝恩摺」という檔案があり [目録: 1472]、さらに同年に「喀什噶爾辦事大臣瑪興阿等奏喀什噶爾阿奇木伯克鄂斯璊謝授胞弟庫車阿奇木伯克恩摺」という檔案があり [目録: 1472]、クチャのハーキム・ベクの穆喇特伯格がカシュガル

キム・ベクの鄂斯璘の弟であることがわかる。

※² 嘉慶元年に「庫車辦事大臣伊桑阿奏代庫車已故阿奇木伯克公買瑪第敏之子謝賞銀兩之恩摺」という檔案があり [目録: 2152-2153]、クチャのハーキム・ベクの買瑪第敏が公の爵位を有していたことがわかる。爵位の一致から、クチャのハーキム・ベクの買瑪第敏が、公品級であり阿都喇璘の長子である邁瑪第敏と同一人物であるとわかる。

※³ 嘉慶 21 年に「庫車辦事大臣來靈奏庫車三等伯克厄穆爾謝任調阿克蘇阿奇木伯克恩摺」という檔案があり [目録: 2481]、クチャのハーキム・ベクの愛穆爾 (厄穆爾) がアクスのハーキム・ベクに転任したことがわかる。先行研究でアクスのハーキム・ベクの額依默爾は鄂對の姪であることが指摘されており [聂・王 2002: 43]、クチャのハーキム・ベクの愛穆爾も同人と思われる。

※⁴ さきに述べたように、咸豐 5 年に伊布拉依木がクチャのハーキム・ベクに任命されている [宮中檔奏摺 406006492 号「奏為賽里木阿奇木伯克身體軟弱呈請開缺並揀員調補先行委署以資治理事」]。

以上のリストに示した血統から、筆者が見出し得たクチャのハーキム・ベク職の就任者 15 人の内、7 人が王公一族であることがわかる。クチャのハーキム・ベクの半数近くが王公一族であることを確認できた。この内、クチャ出身である鄂對の一族が 5 人おり、この一族がクチャのハーキム・ベクの三分の一を占めていた。

(6) シャヤルのハーキム・ベク

シャヤルのハーキム・ベクに任用されている王公一族は、以下の 5 人である。

番号	人名	年次	血統
1	穆喇特伯格 (Murād Beg)	乾隆 45[F1111: 21a, 乾隆 45.7 乙巳]	64) 鄂斯璘の弟 ^{※1}
2	額依木爾 ('Umar)	嘉慶 13 ^{※2}	63) 鄂對の姪 ^{※3}
3	67) 伊薩克 (Ishāq)	道光 6[P14: 8b, 道光 6.7 戊戌]	64) 鄂斯璘の次子 [P14: 8b, 道光 6.7 戊戌 .W12: 11a]
4	邁瑪特 (Muhammad)	道光 15[L15: 367]	67) 伊薩克の次子 [α: 43]
5	84) 邁瑪塔里普 (Muhammad Ṭālib)	道光 28[L28: 434]	83) 木薩の子 [T: 68-72, 咸豐 7.12.27; E 伝 12: 16a]

※¹ 乾隆 45 年にシャヤルのハーキム・ベクの穆喇特伯格がクチャのハーキム・ベクに転任させられている [高宗実録 1111: 21a, 乾隆 45.7 乙巳]。すでに述べたようにクチャのハーキム・ベクの穆喇特伯格は、鄂斯璘の弟である。

※² 宮中檔奏摺 404009885 号「奏為沙雅爾阿奇木伯克愛木爾呈請辦理接濟回民地畝口食並奴才先行散給糧石各緣由」

※³ まず、嘉慶 13 年に愛木爾という人物がシャヤルのハーキム・ベクに在任しており [宮中檔奏摺 404009885 「奏為沙雅爾阿奇木伯克愛木爾呈請辦理接濟回民地畝口食並奴才先行散給糧石各緣由」]、次

いで嘉慶 16 年にクチャのハーキム・ベクに愛穆爾という人物が任命されており [目録: 2406]、さらに同年に巴顔岱という人物がシャヤルのハーキム・ベクに任命されている [目録: 2408]。すなわち、愛木爾と愛穆爾というほぼ同音の名前の人物がおり、愛穆爾のクチャのハーキム・ベクへの任命と同じ年にシャヤルのハーキム・ベク職が缺出している。これは同一人物によるシャヤルのハーキム・ベク職からクチャのハーキム・ベク職への転任であると思われる。クチャのハーキム・ベクの愛穆爾が鄂対の姪であることは、すでに確認した通りである。

(7) サイラムのハーキム・ベク

サイラムのハーキム・ベクに任用されている王公一族は、以下の 1 人である。

番号	人名	年次	血統
1	玉素普 (Yūsuf)	道光 8[R80: 52a, 道光 8.11.3]	阿克伯克の長子 [TH:132; W12: 9b]

(8) ブグルのハーキム・ベク

ブグルのハーキム・ベクに任用されている王公一族は、以下の 5 人である。

番号	人名	年次	血統
1	阿克伯克 (Aq Beg)	乾隆 26[W12: 9a]	72) 色提卜阿勒氏の弟 [W12: 9a]
2	87) 薩里 (Šālih)	乾隆 36[Z: 971]	不明、三等輕車都尉 [Z: 971; A120: 10b]
3	67) 伊薩克 (Ishāq)	嘉慶年間 [X6: 26a]	64) 鄂斯瑞の次子 ^{*1}
4	呼達巴爾第 (Khudā Berdi)	嘉慶 20[Z: 2472]	67) 伊薩克の娘婿 ^{*2}
5	阿皮斯 (Hāfēz)	咸豐 3[M3: 231]	伊斯瑪依爾の次子 ^{*3}

^{*1} まず、嘉慶年間にブグルのハーキム・ベクの伊薩克はイリのハーキム・ベクに転任しており [新疆識略 6: 26a]、さらに嘉慶 20 年に「伊犁將軍松筠等奏請將伊薩克調補喀什噶爾阿奇木伯克摺」という檔案があり [目録: 2469]、伊薩克のカシュガルのハーキム・ベクへの転任が提案されている。すでに述べたように同年にカシュガルのハーキム・ベクに伊薩克が就任しており、同人の転任と見てよい。すなわち、ブグルのハーキム・ベクの伊薩克も鄂斯瑞の次子である。

^{*2} まず、嘉慶 21 年に呼達巴爾第がクチャのハーキム・ベクに任命されており [目録: 2485]、さらに同年に呼達伯爾第という人物がブグルのハーキム・ベクに任命されている [目録: 2487]。つまり、呼達巴爾第のクチャのハーキム・ベクへの任命と同じ年にブグルのハーキム・ベク職が缺出している。これは、ブグルのハーキム・ベクの呼達巴爾第がクチャのハーキム・ベクへ転任したためだと見られる。つまり、ブグルのハーキム・ベクの呼達巴爾第は、クチャのハーキム・ベクの胡達巴爾第 (呼達巴爾第) と同一人物であり、伊薩克の娘婿と思われる。

^{*3} まず、ホータンのイシクアガ・ベクの阿皮斯がヤルカンドのハーキム・ベクの伊斯瑪依爾の次子であることが道光 28 年の上諭よりわかり [道光朝上諭檔 28: 109]、さらに咸豐 3 年に阿皮斯という人物がブグ

ルのハーキム・ベクに任命され [咸豊朝上諭檔 3: 231]、同年にホータンのイシクアガ・ベクに斯底克が任命されている [咸豊朝上諭檔 3: 369]。つまり、阿皮斯という人物がブグルのハーキム・ベクになったのと同じ年にホータンのイシクアガ・ベクが缺出している。これは、ホータンのイシクアガ・ベクであった阿皮スがブグルのハーキム・ベクに転任したためにホータンのイシクアガ・ベクが缺出したと見られ、ブグルのハーキム・ベクの阿皮スも伊斯瑪依爾の次子と思われる。

(9) コルラのハーキム・ベク

コルラのハーキム・ベクに任用されている王公一族は、確認できなかった。

(10) ウシュのハーキム・ベク

番号	人名	年次	血統
1	阿卜都拉 (‘Abd Allāh)	乾隆 25[A108: 8a]	4) 玉素トの弟 [A108: 8a]
2	瑪瑪達布拉 (Muḥammad ‘Abd Allāh)	乾隆 32[Z: 790]	不明
3	阿勒呼理 (Allāh Quli)	乾隆 44[F1089: 8a, 乾隆 44.8 庚午 ; Z: 1342]	不明
4	73) 邁默特阿卜都拉 (Muḥammad ‘Abd Allāh)	乾隆 47[F1159: 19a, 乾隆 47.6 辛卯]	72) 色提卜阿勒氏の長子 ^{※1}
5	81) 邁瑪第敏 (Muḥammad Imīn)	乾隆 50[Z: 1722]	80) 阿卜都喇瑞の長子 ^{※2}
6	托克托泥維爾 (Tokhtī Nazar)	乾隆 52[P19: 7a, 道光 6.8 庚申 ; Z: 1824]	不明
7	玉素布 (Yūsuf)	乾隆 59[Z: 2103]	阿克伯克の長子 [Z: 2103; W12: 9b]
8	愛畢布 (Ḥabīb)	嘉慶 6[Z: 2229]	不明
9	鄂斯曼沙 (‘Uthmān Shāh)	嘉慶 11[Z: 2303]	不明
10	82) 邁瑪特伊巴喇依木 (Muḥammad Ibrāhīm)	嘉慶 11[C 伝 12: 20a]	81) 邁瑪第敏の長子 [C 伝 12: 20a]
11	83) 木薩 (Mūsā)	道光 6[R78: 35b, 道光 8.10.5]	82) 邁瑪特伊巴喇依木の弟 [R78: 46a–47b, 道光 8.11.3]
12	阿哈莫特 (Aḥmad)	道光 9[L9: 100]	不明
13	83) 木薩 (Mūsā)	道光 10[T: 69-70, 咸豊 7.12.27]	11 番の 83) 木薩と同人 [T: 68–70, 咸豊 7.12.27]
14	84) 邁瑪塔里普 (Muḥammad Ṭālib)	道光 16[T: 70-71, 咸豊 7.12.27]	83) 木薩の子 [T: 68–71, 咸豊 7.12.27]
15	阿布都呼依木 (‘Abd al- Raḥīm)	道光 29[L29: 131]	不明
16	呢雅斯 (Niyāz)	咸豊 4[M4: 37]	不明
17	玉努斯 (Yūnus)	咸豊 4[M4: 351]	不明
18	84) 邁瑪塔里普 (Muḥammad Ṭālib)	咸豊 8[M8: 47]	14 番の 84) 邁瑪塔里普と同人 ^{※3}
19	庫吐魯克 (Qutluq)	咸豊 9[M9: 62]	不明

20	76) 邁瑪特愛散 (Muḥammad Īsā)	咸豐 9[M9: 516]	75) 邁瑪特愛瑪特の子 [β: 21-22; E 伝 12: 15a]
21	托胡達 (Tokhti)	咸豐 11[M11: 89]	不明

※¹ まず、乾隆 49 年に「烏什參贊大臣海祿等奏代烏什阿奇木伯克調補伊犁伊什罕伯克謝恩摺」という檔案があり [目録: 1686]、さらに同年に「葉爾羌辦事大臣阿揚阿等奏代色提布阿勒第因補伊子爲伊犁伊什罕伯克謝恩摺」という檔案があり [目録: 1687]、ウシュのハーキム・ベクの邁瑪特阿普都拉は色提卜阿勒氏の子と見られる。すなわち、邁瑪特阿普都拉は色提卜阿勒氏の長子である邁黙特阿ト都ラにあたる。

※² まず、乾隆 51 年に「烏什參贊大臣明亮等奏報新放和闐阿奇木伯克邁瑪第敏謝恩摺」という檔案があり [目録: 1752]、邁瑪第敏がホータンのハーキム・ベクに任命されたことがわかり、さらに同年に「烏什參贊大臣明亮等奏補放烏什阿奇木伯克」という檔案があり [目録: 1762]、ウシュのハーキム・ベクが缺出していることがわかる。これは、ウシュのハーキム・ベクの邁瑪第敏がホータンのハーキム・ベクに転任したために、ウシュのハーキム・ベクが缺出したと見られ、ホータンのハーキム・ベクの邁瑪第敏とウシュのハーキム・ベクの邁瑪第敏は同一人物と考えられる。すでに述べたようにホータンのハーキム・ベクの邁瑪第敏は阿ト都喇の長子である。

※³ 咸豐 7 年の 12 月に木薩の子で輔國公を継承した邁瑪塔里普がウシュのハーキム・ベクの正候補（第一候補）となっており [慶固奏稿: 68-76, 咸豐 7.12.27]、さらに咸豐 8 年に邁瑪塔里普をウシュのハーキム・ベクに任命するという上諭がある [咸豐朝上諭檔 8 :47]。それ故に、邁瑪塔里普がウシュのハーキム・ベクに再任されたと考えられる。

以上のリストに示した血統から、筆者が見出し得たウシュのハーキム・ベク職の就任者 21 人の内、10 人が王公一族であることがわかる。ウシュのハーキム・ベクの内、半数近くが王公一族であることを確認できた。この内、噶岱默特 (Ghadāy Muḥammad) の一族が 6 人と多く、この一族がウシュのハーキム・ベクの四分の一ほどを占めていた。

(11) バイのハーキム・ベク

バイのハーキム・ベクに任用されている王公一族は、以下の 3 人である。

番号	人名	年次	血統
1	79) 噶岱默特 (Gadāy Muḥammad) ※ ¹	乾隆 24[A120: 2a]	阿ト都ラの子 [W12: 11a]
2	80) 阿ト都喇璘 (*Abd al- Raḥmān)	乾隆 25[A120: 7b]	79) 噶岱默特の子 [A120: 7b]
3	玉素布 (Yūsuf)	嘉慶九年前後 [W12: 9b]	阿克伯克の長子 [W12: 9b]

※¹ 小沼 [2003: 47-48] によれば、乾隆 24 年に噶岱默特はバイの「長たる伯克」に任じられ、バイの支配を委ねられた。後代の史料が、これをバイのハーキム・ベクへの任命としている [回疆通志 12: 11a] 点を

鑑みて、リストに加えた。

(12) ヤンギ・ヒサルのハーキム・ベク

ヤンギ・ヒサルのハーキム・ベクに任用されている王公一族は、以下の3人である。

番号	人名	年次	血統
1	72) 色提卜阿勒氏 (Satip Aldi)	乾隆 24[A119: 2b]	齊里克の子 [A119: 1a]
2	21) 邁瑪特瑪哈素特 (Muḥammad Maqṣūd)	道光 8[R78: 35a, 道光 8.9.22]	13) 邁莫特伊布拉依木の弟 [R78: 35a, 道光 8.9.22; E 伝 11: 21a]
3	21) 邁瑪特瑪哈蘇特 (Muḥammad Maqṣūd)	道光 18[H317: 33a, 道光 18.12 庚寅]	2 番の 21) 邁瑪特瑪哈素特と同人 [H317: 33a, 道光 18.12 庚寅]

第三章 各王公一族のハーキム・ベクへの任用の傾向性

本章においては、上述のような都市ごとの任用状況を踏まえた上で、各王公一族の方に焦点を当て、回部における政治的な変動も背景として視野に入れつつ、そのハーキム・ベク職への任用のあり方について検討してみたい。

① 哈密回部

哈密回部の額貝都拉の一族については、ウシュの三品ハーキム・ベクに任用された阿ト都拉 (‘Abd Allāh) 以外、ハーキム・ベクへの任用を見出せていない。これは阿ト都拉の汚職がウシュの民衆の反感を買ってウシュの乱⁽¹⁵⁾の発端となり、ウシュを壊滅へと至らせたためだと思われる。確証はないが、清朝はウシュの乱以降、額貝都拉の一族のハーキム・ベクへの任用を避けているように見える。

② 吐魯番回部

吐魯番回部の額敏和卓の一族は、カシュガルやヤルカンドのハーキム・ベクに任用されている⁽¹⁶⁾。カシュガルとヤルカンドは清朝の版図外に逃げ延びたホージャ家の脅威を強く受けており、この2都市に回部征服で功績のあった額敏和卓の一族が配置されたのは、騒乱勃発時にホージャ側へ寝返ったり、ハーキム・ベクの職務を放棄して逃亡する心配のない、清朝から見て清朝への忠誠度が高いと見なされていた人物をハーキム・ベクに清朝が就けてお

⁽¹⁵⁾ ウシュの乱については、佐口 [1963: 167-180] に詳しい。

⁽¹⁶⁾ 額敏和卓の一族がカシュガルのハーキム・ベクに任用されているという点は既に佐口 [1986: 174]、新免 [2009: 117]、王・馬 [2009: 91-94] の指摘するところであり、本稿はそれを再確認したに過ぎない。

きたかったからだと推測される⁽¹⁷⁾。なお、伊斯堪達爾 (Iskandar) が乾隆 53 (1788) 年にカシュガル⁽¹⁸⁾のハーキム・ベクに任命されているのも、ホージャ兄弟のブルハーヌッディーンの子であるサリムサクの辺外での活動が 1780 年代中盤以降に伝えられ始める⁽¹⁸⁾ ことと関連があるのかもしれない。

③ 居京師之回部

居京師之回部の王公達の内、霍集斯と和什克の一族は、ハーキム・ベクへの任用を確認できた。これに対し、ホージャ家やハーン家は爵位を保持したまま回部に帰還した形跡がなく、したがってハーキム・ベクへの任用も確認できなかった。

霍集斯の一族は、道光年間以降ヤルカンドやホータンといった大都市のハーキム・ベクに任用されており、復権を果たしたようである。霍集斯はホージャ兄弟の政権においてはホータンのハーキムであって、その後、清朝からも総管和闐六城阿奇木伯克に任命され、従前の地位を保全された。そして、霍集斯が北京に留められた後、彼の孫である阿布都爾滿 (‘Abd al- Raḥmān) が回部に帰還⁽¹⁹⁾ し、ジャハーンギールの乱鎮圧に協力し、ヤルカンドのハーキム・ベクに任用された [Newby 1998: 288]。その後、彼の子である邁瑪特愛孜斯 (Muḥammad ‘Azīz)、さらに邁瑪特愛孜斯の子である邁瑪第敏 (Muḥammad Imīn) はともにホータンのハーキム・ベクへ任用されており、祖先と縁があった地位に重用されている。

和什克 (Khūsh Kipek) の一族は、ハーキム・ベクへの任用があまり見られず、道光年間⁽²⁰⁾に邁瑪特熱依木沙 (Muḥammad Raḥīm Shāh) の祖父木巴拉克沙 (Mubārak Shāh) がホータンの三品ハーキム・ベクに任用されていることが確認できたのみである。

④ 居新疆之回部

居新疆之回部の王公達には、ハーキム・ベクに任用されている者が多い。

鄂対の一族は、カシュガルやアクスのハーキム・ベクに任用されている者を多数出している⁽²⁰⁾。特に愛瑪特 (Aḥmad)⁽²¹⁾ は、ジャハーンギールの乱から咸豐年間にかけてカシュガル、ヤルカンド、アクスという三つの大都市でハーキム・ベクを歴任しており、清朝の回部統治の後期において重用された人材だったようである。この一族は、鄂対の回部征服における活躍もさることながら、彼の孫の伊薩克 (Ishāq) がジャハーンギールの乱鎮圧の際に回兵 (ムスリム兵) を率いて活躍し、更にジャハーンギールを捕える上でも功績を挙げており [覲・

⁽¹⁷⁾ この様な推測は既に佐口 [1986: 173-174] の述べるところである。

⁽¹⁸⁾ サリムサクの辺外での活動については、佐口 [1963: 95-102] に詳しい。

⁽¹⁹⁾ 霍集斯の子孫の回部への帰還については、Brophy[2008: 77] にも指摘がある。

⁽²⁰⁾ 鄂対の一族が清朝より信任され諸都市のハーキム・ベクに任用されているという点は既に覲・王 [2002: 42-45] の指摘するところである。この点に関しては、本稿はその指摘を更に補強する材料を提供したに過ぎない。

⁽²¹⁾ 愛瑪特については Kim[2004: 37-39] に詳しい。

王 2002: 46]、それ故の重用と思われる。また、本拠地であるクチャのハーキム・ベクにも、乾隆年間から道光年間にかけて鄂対の一族が任用されており、クチャのハーキム・ベク職とも縁があったと見られる。

色提卜阿勒氏の一族は、アクスのハーキム・ベクを長く務め、またカシュガルやヤルカンドのハーキム・ベクにも任用されている。特に、色提卜阿勒氏が乾隆年間に、玉素ト (Yūsuf) が嘉慶年間から道光年間初期にかけてカシュガル、ヤルカンド、アクスの三つの大都市でハーキム・ベクを歴任しており、清朝の回部統治の初期から中期にかけて、清朝から重宝されていたようである。この一族が重用された理由は、おそらくヤルカンドのハーキム・ベクであった鄂対とヤルカンドの辦事大臣であった高樸が共謀してヤルカンドで玉を私掘していた事を、色提卜阿勒氏が暴いて訴えた[陈超 1987:114] 功績のためだと思われる。しかし、この一族がカシュガル、ヤルカンド、アクスのハーキム・ベクに任用されている者を出しているのは道光年間までで、以降は没落していくように見える。

噶岱默特の子孫の邁瑪第敏 (Muḥammad Imīn)、邁瑪第敏の子の邁默特伊巴拉伊木 (Muḥammad Ibrāhīm)、邁默特伊巴拉伊木の弟の木薩 (Mūsā)、そして木薩の子の邁瑪塔哩普 (Muḥammad Ṭālib) がウシュのハーキム・ベクに任用されており、ウシュの行政においてこの一族が重用されたようである。

薩里 (Ṣalīh) の一族については、薩里自身がブグルのハーキム・ベクに任用されたことしか確認できなかった。

以上をまとめると、カシュガル、ヤルカンド、アクスにおいては、額敏和卓、鄂対、色提卜阿勒氏の三つの一族、ホータンにおいては霍集斯の一族、クチャにおいては鄂対の一族、ウシュにおいては噶岱默特の子孫の一族が、それぞれよくハーキム・ベクに任用されているという傾向にあることがわかる。

おわりに

本稿では、ハーキム・ベクに回部王公一族がどの程度任用されていたかを検討した。その結果、王公一族の中でハーキム・ベクに多用されているのは、特定一族であることを実証的に確認することができた。即ち、額敏和卓の一族（特に郡王を継承する家系）、霍集斯の一族、鄂対の一族、色提卜阿勒氏の一族、噶岱默特の子孫の一族という五つの王公一族である。

特にカシュガル、ヤルカンド、アクスのハーキム・ベクには王公一族の集中的な任用が認められ、さらにホータン、クチャ、ウシュでも多くの王公一族がハーキム・ベクに任用され

ている。人口の面から見て、これら 6 都市で回部の人口の大半を占める⁽²²⁾。すなわち、回部の人口の相当数が合算して半世紀近い年月の間、ハーキム・ベクに任用された王公一族の行政下にあったと見てよい。

これらの主要 6 都市において、長期間にわたり王公一族がハーキム・ベクに任用されたことは、清朝側が王公一族に信頼を寄せていたことを示す。

ハーキム・ベクに任用された王公一族は、現地ムスリム社会において、如何なる役割を果たしたのであろうか。今後の課題としては、ハーキム・ベクに任用された王公一族の活動を研究することを通して、彼らがハーキム・ベクとして果たした役割を究明していきたい。

参考文献

漢文史料

宮中檔奏摺、国立故宫博物院図書文献館所蔵。

軍機処檔摺、国立故宫博物院図書文献館所蔵。

『清代宮中檔奏摺及軍機処檔摺件全文影像資料庫』, 閲覧日: 2012 年 9 月 10-12 日, 閲覧場所: 国立故宫博物院図書文献館。

王公総表: 『蒙回蔵王公扎薩克銜名総表』、蒙蔵院封叙科撰、民国 14 年、『蒙回蔵汗王公銜名表』所収、東京大学東洋文化研究所所蔵。

王公表伝巻首: 『欽定外藩蒙古回部王公表伝』「本表伝」(乾隆 44 年)、「初統表伝」(嘉慶 17 年)、「再統表伝」(道光 19 年)、「三統表伝」(道光 29 年)、『国朝耆献類徴初編』巻首所収、東洋文庫所蔵。

王公表伝四庫全書: 『欽定外藩蒙古回部王公表伝』、『四庫全書』454 所収、上海古籍出版社、1987 年。

回疆則例: 『欽定回疆則例』、賽尚阿等奉勅撰、道光 22 年、東京大学東洋文化研究所所蔵。

回疆通志: 『回疆通志』、和寧撰、文海出版社、1966 年。

嘉慶朝上諭檔・道光朝上諭檔: 中国第一歴史檔案館編『嘉慶道光兩朝上諭檔』、廣西師範大学出版社、2000 年。

咸豐朝上諭檔・同治朝上諭檔: 中国第一歴史檔案館編『咸豐同治兩朝上諭檔』、廣西師範大学出版社、1998 年。

⁽²²⁾ この地域の人口については、堀 [1977: 111-128] に詳しい。

- 逆略『平定回疆剿擒逆匪方略』、曹振鏞等奉勅纂、文海出版社、1972年。
- 『欽定統纂外藩蒙古回部王公伝』、『統修四庫全書』537所収、上海古籍出版社、1995年。
- 慶固奏稿：『慶固奏稿』、全国図書館文献縮微複製中心、2004年。
- 高宗実録：『大清高宗純（乾隆）皇帝実録』、華文書局、1964年。
- 準略『平定準噶爾方略』、伝恆等奉勅撰、中国西北文献叢書編輯委員會、1990年。
- 辛卯侍行記：『辛卯侍行記』、陶保廉著、中華叢書委員會、1957年。
- 新疆識略：『欽定新疆識略』、松筠修、文海出版社、1965年。
- 新疆図志：『新疆図志』、袁大化修、王樹枏等纂、文海出版社、1965年。
- 清史稿：『清史稿』、趙爾巽等撰、中華書局、1976年。
- 仁宗実録：『大清仁宗睿（嘉慶）皇帝実録』、華文書局、1968年。
- 西域図志：『欽定皇輿西域図志』、伝恆等奉勅撰、中国西北文献叢書編輯委員會、1990年。
- 西域同文志：『欽定西域同文志』、伝恆等奉勅撰、東洋文庫、1961年。
- 陝甘新疆方略：『欽定平定陝甘新疆回匪方略』、奕訢等奉勑撰、中国西北文献叢書編輯委員會、1990年。
- 宣宗実録：『大清宣宗成（道光）皇帝実録』、華文書局、1968年。
- 宣統実録：『大清宣統政紀実録』、華文書局、1964年。
- 徳宗実録：『大清徳宗景（光緒）皇帝実録』、華文書局、1970年。
- 那奏議：『那文毅公（彦成）籌劃回疆善後奏議』、那彦成撰、章佳容安輯、文海出版社、1968年。
- 布彥泰葉爾羌奏稿：『布彥泰葉爾羌奏稿』、吳豊培輯、中央民族学院図書館、1982年。
- 文宗実録：『大清文宗顯（咸豊）皇帝実録』、華文書局、1968年。
- 穆宗実録：『大清穆宗毅（同治）皇帝実録』、華文書局、1970年。

テュルク語史料

Tarikhi Hāmidi : Tarikhi Hāmidi, Mulla Musa Sayrami, Nāshriga täyyarlighuchi: Änwär Baytur, Beijing: Millätlar Nāshriyati, 2007.

附編の研究：ジャリロフ・アマンバク、河原弥生、澤田稔、新免康、堀直、『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の研究』、NIHUプログラム「イスラーム地域研究」東京大学拠点、2008年。

中国語文献

- 陳超 1987「鄂対等人在清統一新疆時的貢獻」『新疆社会科学』4、111-115頁。
- 聶紅萍・王希隆 2002「鄂対家族與清代新疆政治」『中国边疆史地研究』2、39-47頁。
- 蘇北海・黄建華 1993『哈密、吐魯番維吾爾王歴史』烏魯木齊：新疆大学出版社。

苗普生 1995『伯克制度』烏魯木齊：新疆人民出版社。

目録：中国第一歴史档案馆、中国人民大学清史研究所、中国社会科学院中国边疆史地研究中心編 1999『清代边疆滿文檔案目録』桂林：広西師範大学出版社。

王東平 2003『清代回疆法律制度研究 (1759-1884 年)』哈爾濱：黒龍江教育出版社。

王力・王希隆 2006「關於霍集斯的幾個問題」『青海民族研究』3、106-110 頁。

王希隆・馬青林 2009「額敏和卓後裔與清代新疆」『中国边疆史地研究』19(2)、87-101 頁。

許福蘆 2006『西域往事 新疆最後一個王公 200 年的家族記憶』北京：華文出版社。

張大軍 1980『新疆風暴七十年』台北：蘭溪出版社。

鄒礼洪 1995「清朝統一新疆開争中の維吾爾族功臣史跡考」『新疆師範大學學報（哲学社会科学版）』3、11-19 頁。

英語文献

Brophy, David. 2008. "The Kings of Xinjiang: Muslim Elites and the Qing Empire," *Etudes Orientales* 25, pp. 69-90.

Fletcher, Joseph F. 1995. "The Biography of Khwush Kipak Beg(d. 1781) in the Wai-fan Meng-ku Hui-pu wang kung piao chuan," in *Studies on Chinese and Islamic Central Asia*, edited by Beatrice F. Manz, Aldershot and Hampshire: Ashgate/Variorum Press, pp. 167-172.

Hamada Masami. 1978. "Islamic Saints and Their Mausoleums," *Acta Asiatica* 34, pp. 79-98.

Newby, Laura. 1998. "The Begg of Xinjiang: Between Two Worlds," *Bulletin of the School of Oriental and African Studies* 61(2), pp. 278-297.

Kim Hodong. 2004. *Holy war in China : The Muslim Rebellion and State in Chinese Central Asia, 1864-1877*, Stanford: Stanford University Press.

日本語文献

ウラジーミル・ウスペンスキー 2004「モンゴル、チベット、東トルキスタンの歴史史料としての『欽定外藩蒙古回部王公表伝』」『神戸大学史学年報』19、3-9 頁。

小沼孝博 2003「征服前，清朝の対カシュガリア政策の推移」『史峯』9、40-51 頁。

小沼孝博 2007「ベク制度の創設—清朝公文書による東トルキスタン史研究序説—」『内陸アジア史研究』22、39-59 頁。

加藤直人 1991『『欽定回疆則例』について』日本大学史学科五十周年記念事業実行委員会編『歴史学論文集』東京：日本大学史学科五十周年記念事業実行委員会、614-627 頁。

佐口透 1963『18-19 世紀東トルキスタン社会史研究』東京：吉川弘文館。

佐口透 1975「チャガタイ・ハン家の末裔と清朝」松田壽男博士古稀記念出版委員会編『東

- 西文化交流史』東京：雄山閣出版、364-377 頁。
- 佐口透 1986『新疆民族史研究』東京：吉川弘文館。
- 佐口透 1995『新疆ムスリム研究』東京：吉川弘文館。
- 真田安 1983「創設期清伯克制からみたカシュガリア・オアシス社会」護雅夫編『内陸アジア・西アジアの社会と文化』東京：山川出版社、437-458 頁。
- 新免康 2009「『ターリーヒ・ラシーディー』テュルク語訳附編の叙述傾向—カシュガルの歴代ハーキム・ベグに関する部分を中心に—」『西南アジア研究』70、111-131 頁。
- 堀直 1977「十八—二〇世紀ウイグル族人口試論」『史林』60(4)、111-128 頁。
- 堀直 2003「『大木文書』のベクたち—北京第一歴史档案館所蔵史料との検証—」『甲南大学紀要文学編』129、1-33 頁。
- 宮脇淳子 1991「祁韻士纂修『欽定外藩蒙古回部王公表伝』考」『東方学』81、1-14 頁。

(中央大学科目等履修生)